

# Report

## 北のさいいはて、利尻島における地域医療のモデル的展開② 救急医療

医療ジャーナリスト 北川 巳代

前号に引き続き、利尻島国保中央病院の医療を救急の実情を中心に紹介する。離島の医療のなかでも島内における救急のほか、島外の高次医療機関への救急搬送はもつとも大きなテーマの一つだ。その体制改善への努力も積極的で、北海道全体の災害救急対策充実への引き金ともなっているようだ。医師たちは離島の住民の救急医療という命綱をどう強めているのだろうか。

### 島内唯一の救急病院として 救急患者のほぼすべてを診療

利尻島国保中央病院は、島内の中核病院で、救急患者のほぼすべてを診療している。

同病院で手に負えない患者は、市立稚内病院や札幌医科大学病院などの高機能病院へ送る。救急搬送は、日中はカーフェリー（定期船稚内間一日四往復、冬期は二往復、所要時間一時間四〇分）を利用することが多いが、さらに緊急を要する場合はヘリコプターや飛行機が頼りだ。

「われわれは麻酔科、ICU、CCUなどを研修し、救急医療の応急処置プログラムアップの治療をして送り出すこととなります」と西野徳之院長はいう。

その背景には、救急車が現場へ到着して病院へ搬入するまで長い時は約一時間、平均で三〇分近くかかるという状況がある。

利尻島には救急車が、利尻町、利尻富士町に各一台、計二台ある。地元消

る。時には救急車に患者を搬入する前に医師が到着することもあるという。救急搬送された患者の疾患別内訳（八五年四月～九六年一月）は、整形外科疾患が最も多く二八％、次いで多いのが脳外科疾患（二二％）と消化器疾患（一四％）。そのほかに産婦人科疾患や腎・泌尿器科、心・血管などの疾患患者がわずかながらあった。

男女別では男性が半数を超えている。そして、患者は冬よりも旅行者や交通事故の多い夏期のほうが多いという。交通事故の大半は、飲酒が関与している。

### 島外への救急患者搬送状況と かかりすぎる所要時間との戦い

離島という地域性をカバーするために、同病院では行政の協力を得て、画像伝送診断支援システムや高度医療機器を導入。自己完結型医療の実現につとめている。しかしそれにも限界はあり、そうなる島外の高次医療機関へ救急搬送することになる。

その数は、年間約五〇人。ここで島外への救急搬送状況と、それをめぐる動きを追ってみよう。八五年四月から九六年一月までの救

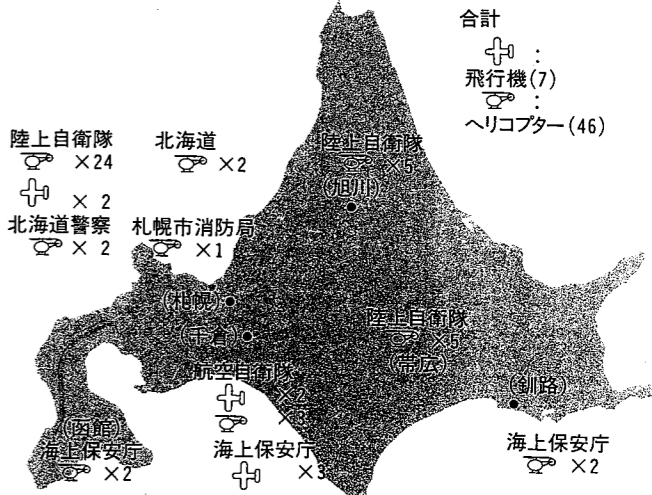
最大の課題は消防隊との「交信法」である。消防無線は一般には流用できない規則がある。最近、都会では乱用されている携帯電話もポケットベルも、同島ではまだ使えない。今のところ無線に頼るしか緊急連絡法がない。

そこで病院スタッフらは、何らかの形でその無線が使える可能性を模索。消防署や利尻町などと協議を重ねている。さらに通信衛星やISDNを利用するなどして山間部や離島における携帯電話使用の早期実現をNTTにも働きかけた。その結果、九七年早々には、携帯電話が使用できそうな見通しとなった。

急搬送件数は全部で三九三件。その搬送手段は、定期船三二七件（八二％）、ヘリコプター五〇件（一二％）、飛行機一七件、巡視船九例であった。

これらのうち航空機による搬送六七件の内訳は、北海道警察航空隊によるものが最も多く三三件、自衛隊ヘリ一七件、同飛行機一六件、海上保安庁ヘリ一件となっている。

依頼先は市立稚内病院が八割、札幌医科大学へ一割余り。ほかに中村脳神



現在の北海道の救急搬送可能航空機配備状況

防隊、利尻・礼文消防団員によって救急車で搬入された人の数は八五年から九五年七月までの一〇年間で一〇五八人。年平均でおおよそ一〇〇件であった。これは最近二年間にも同様の傾向をみせ、出勤回数同様の傾向であった。

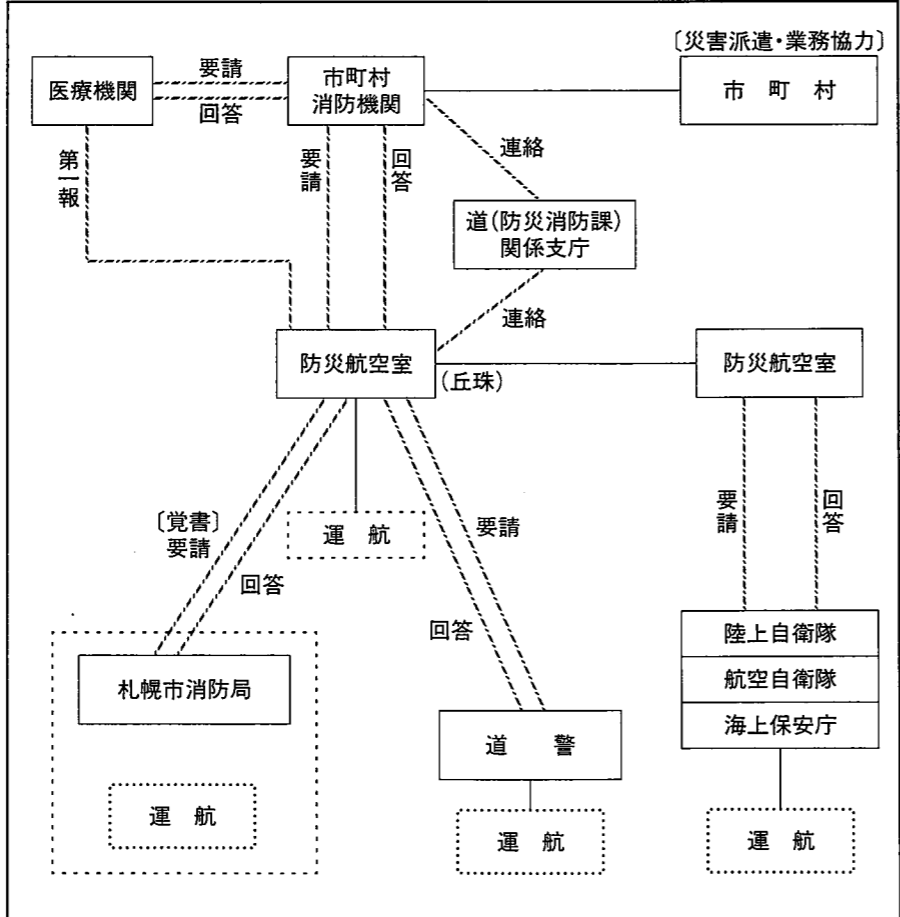
同病院への到着時死亡状態（DOA）の患者で蘇生できる割合は少ない。一方、救急車で搬入されたものの、治療経過をみると、入院が約八割、外来で応急処置と治療ですんだ人が一割余り。応急処置を施したうえで、直ちに島外の後方支援病院に搬送した人は五％であった。

利尻島は中心部に標高一七二二mの利尻富士がある。この地形のために、人が居住しているのは海岸沿いの平坦な地域だ。そして道路も海岸線に沿った一本道である。

そこで患者や救急隊からの連絡で、一刻を争う事態となると、医師が病院から現地方向へ急行すれば必ずどこかで救急車と合流できることになる。ドクターカーの試みをしている。

救急車内で医師が応急処置をしながら病院に搬入すれば経過もよく、死亡率も高まるわけだ。実際に交通事故の男性や特別養護老人ホームの誤嚥の患者などを、こうした方法で善処していた。

＜表1＞新しいヘリコプターの運航系統



情報を一斉に流すことにより搬送時間の短縮が可能となった

経外科（札幌、旭川日赤、市立旭川病院など）がある。

ちなみに日常の交通機関の一つ、エア北海道の飛行機は救急搬送には協力していない。

道警のヘリは、札幌・丘珠空港から医師を同乗させて飛んでくる。しかし、使用ヘリコプターの航行継続距離が短いため、往路の途中、豊富（宗谷管内）で給油する必要がある。このため、利

尻までの平均所要時間は一一一分。復路は八九分かかる。

一方、自衛隊は千歳基地から飛行、無給油で利尻空港に着く。ヘリの場合六八分間で着く、帰路は六六分。飛行機が五三分間で到着、帰りは五二三分間となっている。そして利尻空港での患者搬入所要時間はおおむね八分間であった。しかし、いずれも気象条件や離着